

# 第1部 「学校ビオトープの活用等に関する調査」の報告

## 1 調査の概要

### ① 調査の目的

改正後の教育基本法では、教育の目標の一つとして「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」とする規定が盛り込まれました。それを受けて、新学習指導要領では環境保全の観点から自然事象について体験的に学習する内容や生態系概念育成にかかわる内容がこれまで以上に充実しています。そうした要請に応えるためには、多様な生物が生息する環境が子どもたちの身近にあることやその環境を活用した環境教育が展開されることが求められます。学校ビオトープは、その課題に応える一方法です。大阪市では、現在約60校園で学校ビオトープの展開がなされていますが、それらをより推進していく必要があります。

そこで、現在実施されている学校ビオトープの活用や維持管理の成果と課題を明らかにすることによって、今後の学校ビオトープの活用を向上させる方策を見出すため、本調査を実施しました。

② 調査時期 平成20(2008)年8月

③ 調査対象 大阪市における学校ビオトープ実践校  
(「環境教育に関する調査」(2007年度)への回答校)

- ・ 幼稚園 4園
- ・ 小学校 42校
- ・ 中学校 7校
- ・ 特別支援学校 1校

### ④ 調査内容

- ・ 学校ビオトープの活用について

活用の際の主なねらい、活用上の問題点、子どもたちの体験・意識の変化

保護者・地域住民の関わり方、学校ビオトープの活用及び維持管理に関するノウハウの共有化

- ・ 空間構成について

空間構成の増加及び減少のきっかけ

など

## 2 調査の結果

### (1) 学校ビオトープの整備動向

学校ビオトープの整備動向は、大阪市教育センターが 2007 年に実施した「環境教育に関する調査」にもとづいて整理した（図 1）。

1998 年に整備したのが 9 校園（以下、校）と最も多く、その後も毎年約 5 校での整備が行われている。1998 年に最も多いのは、1997 年に大阪市教育委員会から学校ビオトープ整備に関する通知が出されたり、1998 年に大阪市教育センター主催の研修会などが行われたりしたことが影響していると考えられる。それ以降も毎年数校で整備されているのは、2004 年まで学校ビオトープに関するリーフレットが発行され、配布されたことが影響していると考えられる。

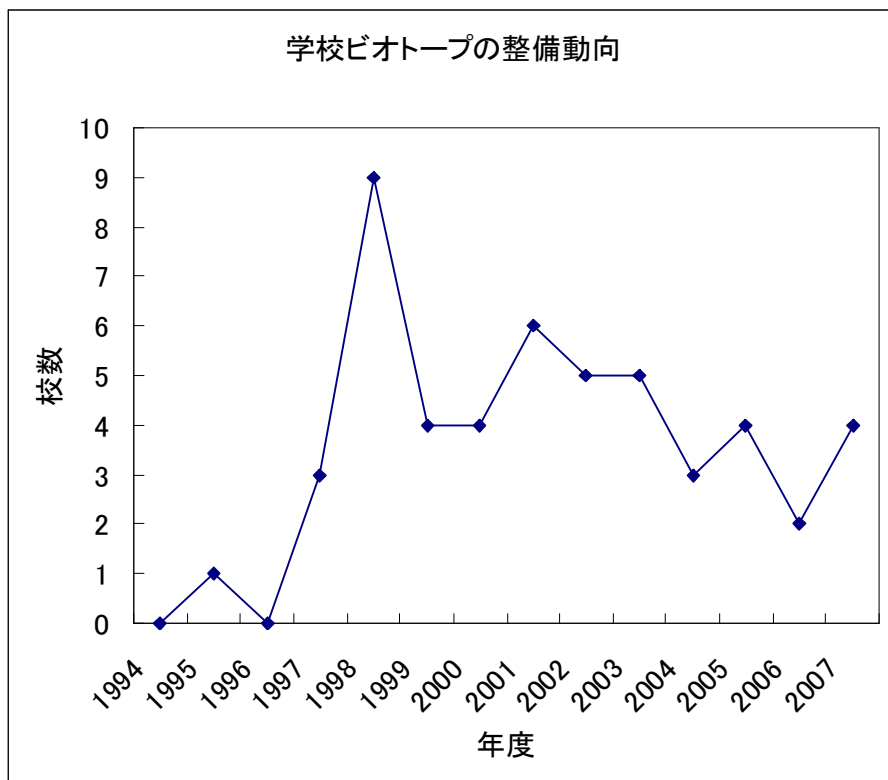


図 1 学校ビオトープの整備動向

## (2) 学校ビオトープを活用する際の主なねらい

学校ビオトープを活用する際の目的を、用意した選択肢の中から3項目選んでもらった結果、「教科・領域の学習教材として」(42校)が一位となっている。2004年の調査に比べると、実施校数が増加している。次に、「原体験の場として(感覚を通した生物、土、水、石などのふれあい)」(32校)、「『総合的な学習』の学習教材として」(32校)、「“やすらぎ”の場として」(25校)への反応が高い(図2)。

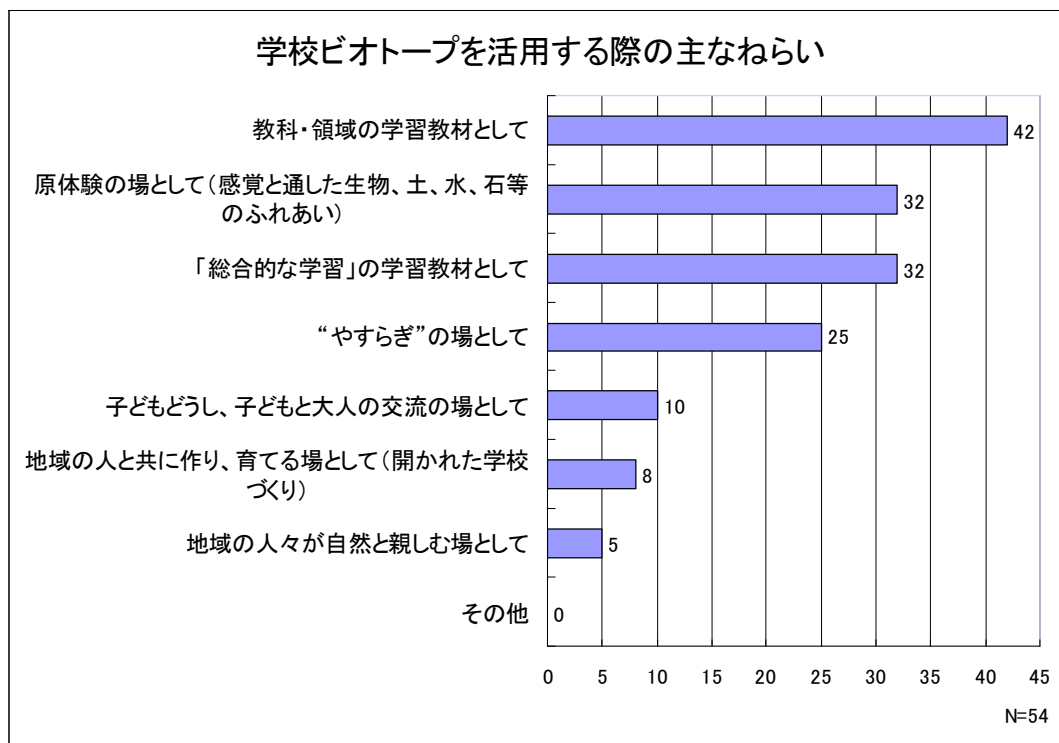


図2 学校ビオトープを活用する際の主なねらい

### (3) 子どもたちの自然・生物に対する体験・意識の変化

学校ビオトープの整備、活用を通して、子どもたちの自然・生物に対する体験や意識に何らかの変化が認められるようになったかを、選択肢を用意して尋ねた結果、53校中35校(66%)が「変化が認められる」を選択している。そのいずれもが学校ビオトープの整備から数年を経ている学校である(図3)。

次に、認められた変化の内容を尋ねた結果、記述数の上位3位を「生物に対する興味・関心が高まった」(33)、「自然・生物とふれ合う機会が増えた」(30)「自然・生物に対する見方・考え方が深まった」(12)が占める。さらに、落ち着きを増したり、人と人とのつながりに効果をあげたりしている(図4)。

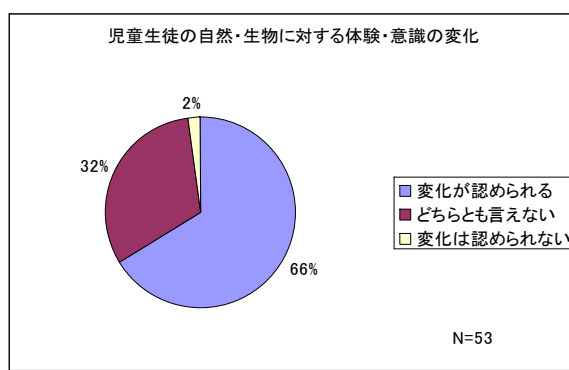


図3 児童生徒の自然・生物に対する体験・意識の変化

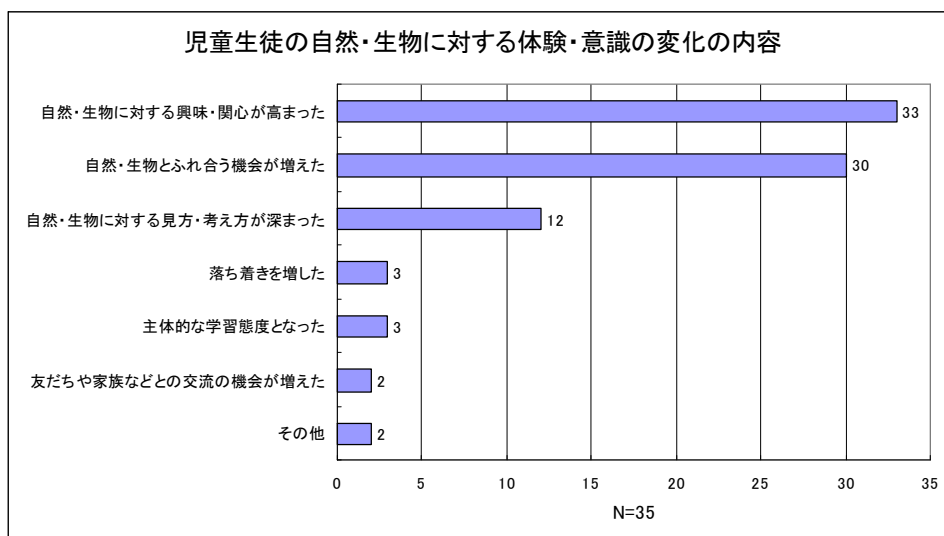


図4 児童生徒の自然・生物に対する体験・意識の変化の内容

### (3) 保護者や地域住民の学校ビオトープに対する関心の程度

保護者や地域住民の学校ビオトープに対する関心の程度を、選択肢を用意して尋ねた。その結果、「積極的なかわりはないが、理解はある」とする学校が56.6%と最も多く、「学校ビオトープに関する行事や活動に積極的にかかわってもらえる」(18.9%)「教職員との会話の中に学校ビオトープが話題にのぼる」(15.1%)と続く(図5)。計画、整備段階に参加してもらうようにしたり、「学校だより」を出したりするなどによる啓発活動が効果をあげた結果と考えられる。

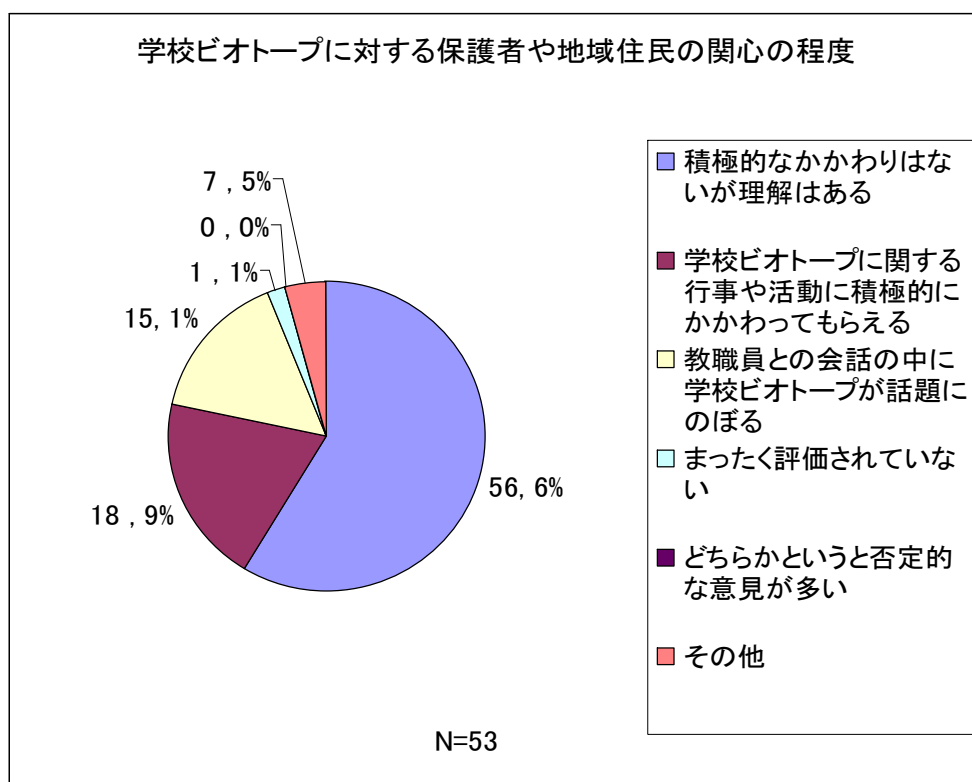


図5 学校ビオトープに対する保護者や地域住民の関心の程度

#### (4) 学校ビオトープ活用上の問題点

学校ビオトープを活用していくうえでの問題点について、選択肢を用意して尋ねた。その結果、「維持管理するための予算がない」(27)、「維持管理に費やす時間がない」(26)、「ビオトープ設置にかかわった教職員が在籍しなくなった後、他の教職員の関心が低くなった」(23)、「活用するための組織的・計画的取組みがない」(23)、「維持管理が一部の人だけの負担になっている」(22)、「維持管理の正しい方法がわからない」(22) という順に記述数が並ぶ(図6)。

学校ビオトープが存続し、多くの人々が活用できるようにするには、維持管理や活用に関するノウハウについて教職員が共有したり、各教科等に位置づけて活用した実践事例を共有の財産として保管したりする工夫が求められる。本調査の実施校の中には、「活用・維持管理活動の記録、保管・引継ぎ」を行ったり、「全教職員対象の学内での研修会」を実施したりして教職員の共通理解を図る工夫をしている校園もある。また、「教職員によるビオトープ委員会」を設置し、特定の教職員のみにも負担が偏らない工夫も行っている。それらの取組を参考にしたり専門家との連携を図ったりして、学校ビオトープの活用を推進していくことが望まれる。

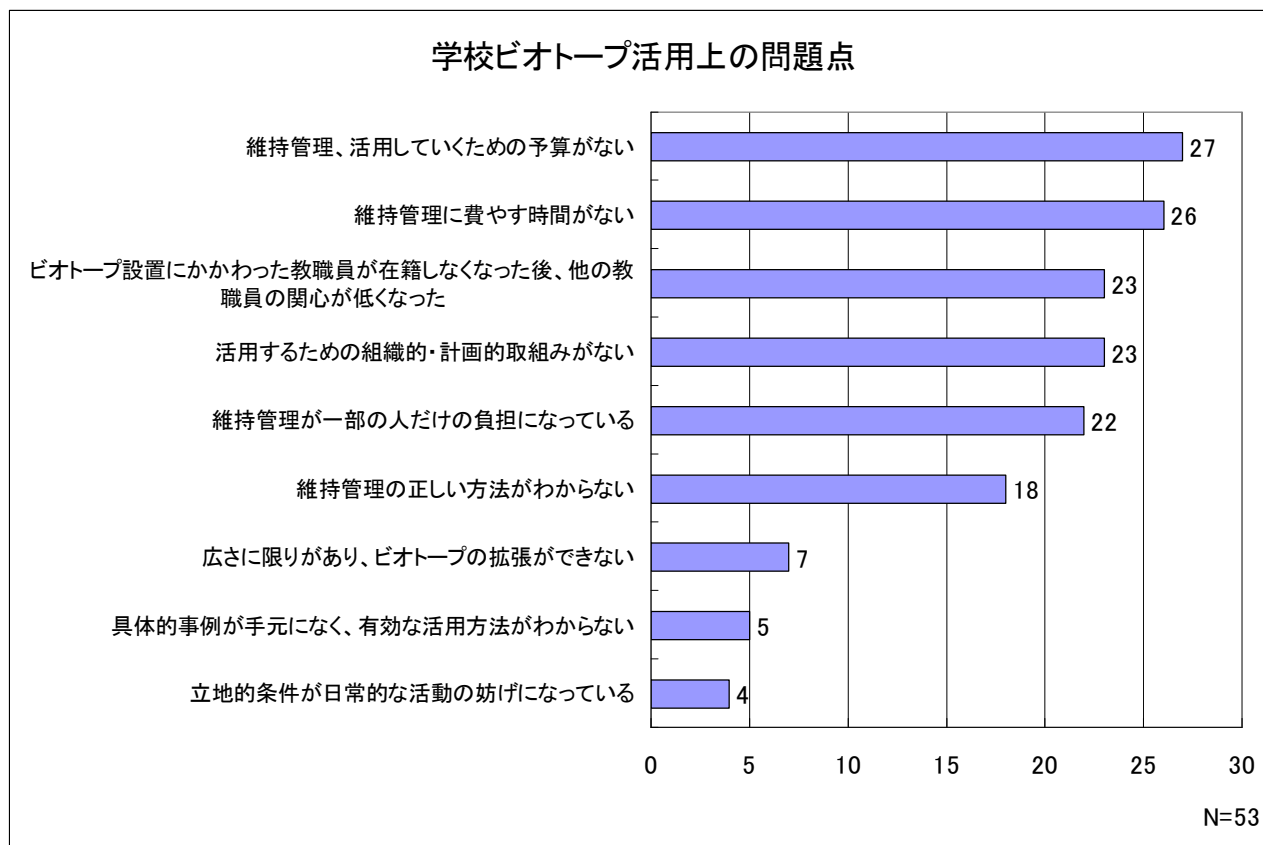


図6 学校ビオトープ活用上の問題点